

【プロジェクトの概要】

広島は古くから瀬戸内の地形風土に根差した歴史文化を構築し、世界遺産の宮島を始め、今日までその遺構が随所に残されている。中でも江戸時代は、広島藩が国内外の廻船航路の拠点として商業や産業を急速に発達させ、それに付随する個性的な町文化が多く形成された時代として知られている。

本研究は、芸術学研究科日本画研究領域に在籍する大学院生ら12名が、この時代の面影を残す場所として国の重要伝統的建造物群保存地区に指定される「竹原市竹原地区」、「呉市御手洗地区」を訪れ、事前の調査を制作のコンテクストとして引用しながら現地でタブロー制作を行ない、その成果を広く一般に公開する地域展開型の芸術プロジェクトとして実施した。

この取り組みは、観光地として整備し継承される瀬戸内の風景を「海路に栄えた歴史文化」という大きな繋がりの中で俯瞰し、絵画的な視点とアプローチからその原風景を捉え直すことにより、地域の魅力を再認識する新たな機会を創出し、芸術の社会的有効性を発信することを目的としている。また同時に、作家の芸術表現における作品の性質や表現的指向に個々を取り巻く風土環境が大きく関与することに着目する教育プログラムとして、広島のかつての時間と意識的に対峙し、現場における直接的な身体感覚を媒介としたインプットとアウトプットを同時に行なう経験を通じて、自己の絵画表現により深い洞察を傾けようとするものである。





「呉市御手洗地区」での調査、現地制作の様子





「竹原市竹原地区」での現地制作の様子



展覧会「広島海景—2022年度日本画専攻地域展開型芸術プロジェクト—」（ギャラリーG／広島市中区）

【プロジェクトでの成果等】

事前調査で得た知識をコンテキストとして現地でタブロー（本画）を完成させるという、日本画専攻としては実験的な要素を多分に含む本プロジェクトにおいて、参加した学生らは、和紙、墨、顔彩をはじめ、パステル、綿布、トイレットペーパー、スチレンペーパー、油性インクなど、日本画に親しいものから一見かけ離れたものまで各々多様な画材を選択し制作をおこなった。岩絵具を膠と水で溶き、何度も塗り重ね、乾くのを待ち、また塗り重ねる普段の制作とは違い、現場で短時間に仕上げなければならない制約は、使い慣れたものの異なる扱い方や捉え方を、または新たな材料表現への試みを促し発露させるきっかけとなった。

現地で制作した作品は、展覧会「広島海景—2022年度日本画専攻地域展開型芸術プロジェクト—」（ギャラリーG/広島市中区）として2022年6月に展示公開した。本展は同年新たに開始されたアートプロジェクト「ギャラリーG+広島市立大学芸術学部共創展」の第一回企画展に編成される運びとなり、中国新聞や広島県庁文化芸術課が運営するWebサイト等で広く地域に紹介され、多くの来場者を迎えた。展示会場で配布された展覧会目録には、多くの参加者が現場特有の時間の流れに自己を一体化させながらインタラクティブに線や色を置き、形を探っていたことを、またある参加者は移動し続ける自らの歩行と視点の交錯というアクティブな要素を制作の方法論に置き換えて実践した様子を書き記しており、若い感性の多様な試みを見ることができた。一方で、展覧会の展示構成についてはいくつかの課題が残された。会期後に行なったアンケートでは、「インスタレーションの感覚に近かった」との印象を持つ参加者が多い中で、「全体をどのように調和させるのか、させないのか、展示の方向性をもっと事前に検討すべきだった」、「キャプションは必要か、または本展にふさわしい素材やレイアウト方法が他にあった」などの意見が寄せられ、通常の日本画展示と比較してこうした部分の計画により多くの時間を配分し、プロジェクト全体の意図や取り組みを最適な形で提示する必要があることを確認した。

私たちが暮らす日常には、当たり前として振り返らない多くの物事がある。戦後77年目を迎える広島は、「ヒロシマ」として世界に平和を発信する国際都市へと発展を遂げた一方で、原爆により戦前まで受け継がれていた多くの歴史文化が市民の身体的記憶から乖離し、現在もなおその状態から回復できていない印象がある。本プロジェクトは、「広島」という土地の風土性をこれまで述べた方法と目的において社会に提示し、明日を担う若い作家たちの意識下に喚起しようと試みるまだ始まったばかりの小さな取り組みだが、芸術に携わる立場から地域社会ないし個人の豊かな未来を考えると、こうした研究の種を蒔き続けることの重要性を信じ、今後も継続していきたいと考えている。